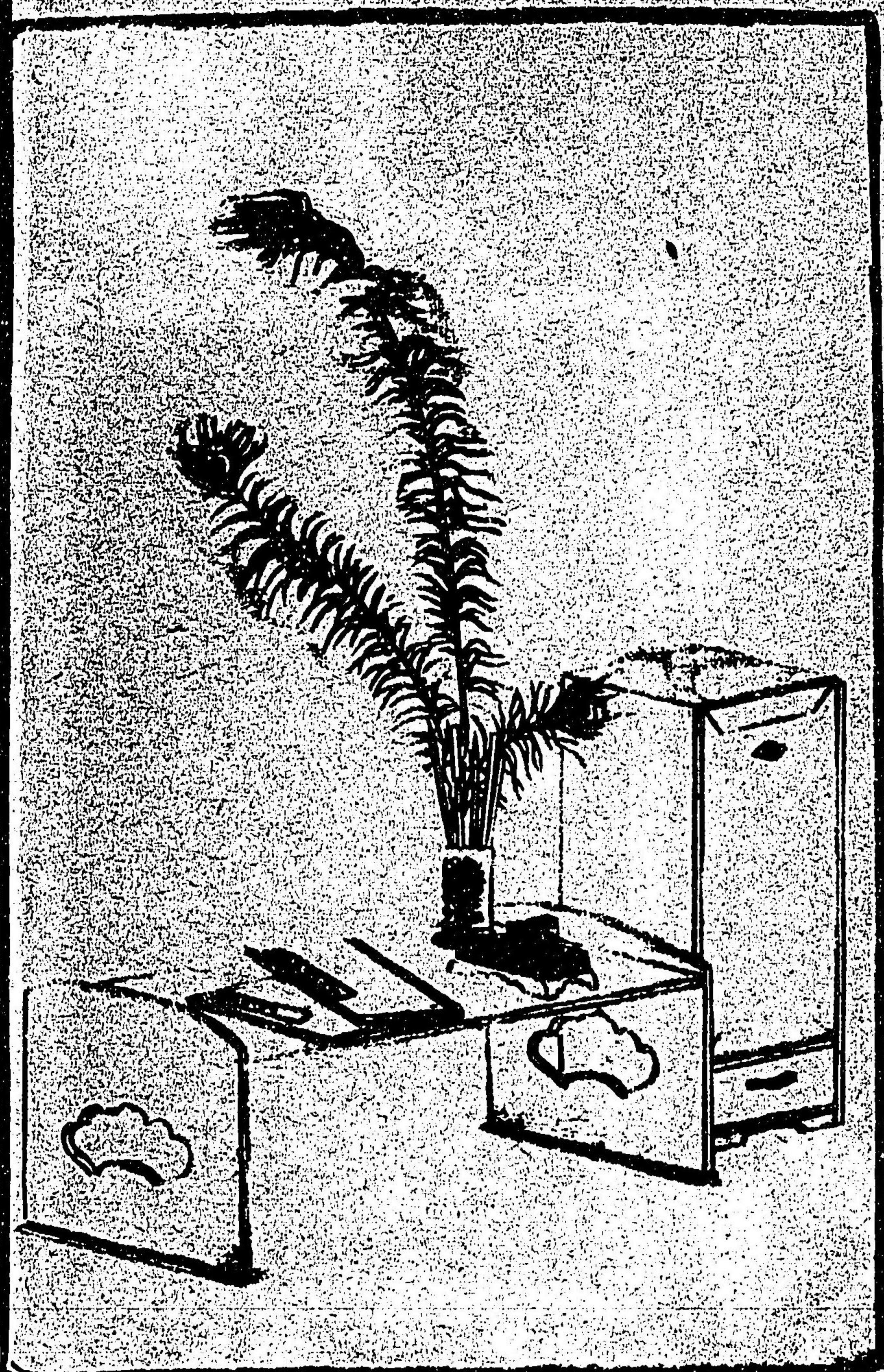


特42

849

石童丸蒟萱實記





No. 10801

特 42

此木亭編の亭保元文の頃の淨瑠璃作者として其著作も多かる
 中は一層世に行われし蒔繪桑門筑紫機あり抑此淨瑠璃の亭
 保二十年に始て大坂豊竹座に於て興行せし以來東都の俳優澤
 村宗十郎屢々是を演じ非常の喝采を得てしより世評頗る高く
 今も其名を傳えて著明かり此度鶴聲社主人の需めに應じ夫が
 本傳を綴りあし活版に上せて市あひさげバ愛讀の婦女童幼た
 ちよ加藤の積善子孫に幸福し大内の積不善國を縮むるに至る
 の形勢果敢あき草子にあなれども心を用ひて讀給ひし勸善懲
 惡の一助とやならん

天時明治十七歲四月

白台隱士

梅亭金香誌



新置物語

第一回

東京 梅亭 金香 編次

爰に筑前國の領主に加藤左衛門尉繁氏と云ふ人あり禁庭守護の役をつとめ暫く京都も在番して居たりしが有一日勤務の暇に入幡ある男山八幡宮へ詣んとて其地に赴きし歸り路狐川の渡し場を到りける時しも黄昏近くありぬれば旅宿へいそぎ旅人ども渡しの船に乗後れど岸に立集る向ふより濃くる船の着とひとしく待設けたる人々の乗んとあしつ船ある者い上らんとしつ双方が揉めふ中も浪人体の侍二人行違ひさま如何しけん互ひの両刀もぢり合しをほどく拍子に一方の脇指がツキと折かれれば折られし侍こらえ兼相人にむかひて「拙者い遠州の浪士なれど此度奉公のため西國へ下る者過失との申しながら貴殿に此如く指添とこぢ折られ面目次第もあき始末四下に人も見ては坐れば何卒我が耻辱の雪げる様お取計らひ下され度若しは思案も及はずバ身不肖ながらは相手あり一ト勝負仕らんは返答を

伺ひたしどもぢり寄バ一人の侍「お腹立のゆ尤去來其おわびを致さんと言つゝ刀拔出し兩手に握つて鏢元より二ツに折て投出し「是見ふれよ拙者ども此通り元某しハ播州の浪人都へ上り奉公あさんと思へど路銀の足あさましく武士あり有まじき事ながら彼の一刀を汝却きし代りの即ちあれある竹光貴殿の差添拙者の刀耻辱の一倍是あても未だお怒解すバお相手と仕つらうか夫も辭退の致さぬト云ふお此方の感服あし「事おわけたるお言葉如何にも心の解ました「然らバ急ぎの旅路ゆるはや是よてお別れ申す」



某しとても同様と禮を述つ、東西へ別れて行を側る在て始終の機子見聞せし繁氏の若黨横
 口戸平「如何に浪人すればとて魂が竹光とハイヤ呆れて物が云へぬアハハハ、ト嘲り
 笑ふを行過たる兩人聞つけ元の處へ立戻り彼の如く沙汰せられてハ不本意ながら此儘にハ
 濟し難しとい云へ彼等の様ある下郎の相手にするも大人氣をければ去來漸よくさし違へ此
 耻辱を雪がんと互ひに鯉口つくるげて進み寄たる真中へ繁氏直と走り入「待れよ涉兩士某
 しハ加藤左衛門尉繁氏と云ふ者則ち當所の禁廻より馬の飼領に下されし地其場あ於て涉身
 等が横死ささば後の難義夫のみならず涉邊等も纒の耻に命を捨るハ是犬死と申すもの此道
 理を心得て差錯たれと此差替怒と共におさめられよト大小の刀とり出し兩人に分與ふれば
 二人ハ「ハッ」と押越さ世にあり難きは情何日かの報ひ奉らん元我々の何某と云ハんとする
 を押しめお名承のつてハ我が寸志も無益とされれば先の其儘重てお目に懸るともお近附でハ
 ハ坐らぬぞと云ハつ、傍邊を見返りて彼の戸平を呼出し「其方の今日限り身の暇をとらす
 程ハ何れハありとも立法とせと首渡されて置くハ戸平今更詮方あるまよとの甲斐あり事と首出

し恩の罪を蒙りしと頼りごちつ、ハすと
 く、と何處ともなく去よける慈悲よ慈悲
 す計らひに二人の浪士の繁氏の前ハ叩頭恩
 とハ謝して双方へこそ別れけれ繁氏も又察
 來引つれ館へぞ立歸りぬ斯て翌年皇帝より
 繁氏へ多年勤務の賞としてハ母君通陽門院
 の召仕ハ玉ふ千鳥と云へる美女を側室にぞ
 賜ハりけるが程おく其年も暮れ明年の春も
 彌生の頃繁氏守護の任滿おければ近々飯國
 あるべしとに國許より内室收の方迎ひとし
 て登られたり

○第二回



本妻と側室の交情よからぬ世間の常の事あるに牧の方と千鳥の前の然るけはひの露程もあく同胞の如く睦しければ家中の者の云ふ迄もなく人々感じあへりとぞ一日繁氏禁内へ飯國のお暇乞に参内せし留守お牧の方千鳥の前と諸共に頃しも彌生の中空るれば一重お八重をこき混て咲さかりたる奥庭の櫻を見んと花見の坐敷に立出られし其處へ腰元どもが持運ぶ双六盤や歌骨牌野風爐提重茶辨當置あらべし座敷をば野山に見立し時の興かずく廻る盃に牧の方機嫌よく「ナント千鳥殿アノ櫻を題にして腰折ありとも一首づゝ短冊をつげ殿様のお飯りの折お目にかたお笑ひ草にせうでいあいかト云へば千鳥も點頭て「ようお氣が付ました及ばず乍らト双六盤と中へ据ゆゝ兩人の臂をもたらせ案じ居しが次第お出る酒の酔に思ひす互ひにとろくと睡眠ければ腰元ども「交情のよい同士打解て必よふは寝なつた此間妾達も休息と密語あひつ襖をば密とさしてぞ退出ける程あく繁氏飯館の報告と共にまづく奥の間へ入来るに執權職監物太郎出迎ひ「我君のお歸りを奥方にい未だは存じあいらト花見坐敷の襖をば開んとするを繁氏おし止り「朝廷の首尾意外ふよくお暇をた

まひりし其悦びる兩人が余念もあぐ寝入る風情と有となし花の下にて一献汲ん酒もてと宣へば監物太郎近侍の者に吩咐々持出さす盃繁氏取上れば太郎銚子を取のべて次かけたりし其折から日和のいと長閑なるに如何あしげん櫻の蒼一ト房盃中へ落散ける繁氏は見やりつゝ「風雨も逢て盛りける散り天然の理あれとも未だ時にもあひぬ若の事あく散し心得ず是を佛の教え玉ふ老少不定疋定め難き人の命忘るまじき後生の道と文武にさどき繁氏の無常を觀せし悟道の言葉打萎れたる有様に監物太郎



も尤もど共に悟りの開け共態と嘲り「君も似氣なき女々敷い言葉釋迦と云ふ賢僧圓様々の偽りを言ふらし一文不知の者どもを修さん爲の一切経取に足らざる事どもをば心懸圧ふもト腹に思ひの雜言も主を勵ます忠義心繁氏の感じつ」「誠に其方の言通り弓馬の家に生れ乍ら佛法などに迷ひなされて武の道の立難し此後屹度思ふまじ去あがらよし事専ふ氣がふさき何とやら物淋しけれバ檢校に申し付琴まらべさせよ我の是にて慰さん」とく
 一と宣へバ監物太郎承まのり此由申し傳えんとてお表の方へ立出けり繁氏ほどに敵の方や千鳥の前を呼覺し酒宴の相手させんとて引開んとする襖の中俄に向やら物騒かしきあ何事あらんと復かし開打見やれば是れそも如何余念なく眠りし兩女の黒髪逆たち蛇の如くかま首もたげ喰合さるるさしもの繁氏呆れて言葉もあかりしが爰にいよく發心なし佛の敵の外面女菩薩内心女夜乃の是れん陽の互に睦しきも心の底の邪鬼執念絶ぬ証の如し汗淺ましと思ひし、過刻に櫻の替の散しに思ひくらべて觀すれば財寶榮花も望みしと悟れバ起る菩薩必は烏帽子狩衣ぬき捨つ差添ぬいて髻をフツつと切たる輪廻のさづみ現取

出し書置を認め終りて髻に添て傍に残し置身の裏門よりすごとく忍び出れ出たれと流石妹脊の恩愛よ心ひかされ暫らくの歎かに正体なよ竹のふしたる二人が夢さめて斯と知らバ嘸悲まん不便やど再三再四見返つ足早は行衛り知れず成にけり斯とも知らず監物太郎酒宴の用意吩咐立出見れば繁氏の影もあくして一間の裡物騒がしきを不審見るに件の怪しき様お驚き走り寄差添ぬいて喰合くる髪されバ兩人仰天しつ目さめて互ひに顔見合せ茫然として居たりけり

○第三回



監物太郎四下を見廻し我君のましまさず鳥帽子狩衣の脱捨あることを心得ねト立寄見れば
 警に一通添て殘しおれば是れ何事と一通とり上牧の方へ差出すに牧の方も驚きながら封
 とくく讀下せば「書殘す一通一つ我弓箭の家も生れし身にて家國を捨棄子を捨世も捨人
 の沙門に入しを胸狭き女心に淺ましき姿を見せける故と思ひ誤り俱も姿を變ましく思はんが
 手が發心の左に倚らず妻子珍寶不隨者とわれ死出の旅路の別れごとくと言乍ら忘れ難き
 の我子石動丸二才の時國に残し夫より七年余り顔を見ずいへば無成人いたし大人敷もなり
 いんと思へばいとあつかしく忘るゝ事い是あくい和女何卒監物と計り石動ともり立我跡
 目を繼せ下され度一重に頼みたり千鳥へも一通殘したく存じいへども心せられいま、此
 みを共にながめ奥に力とつけ呉よかし首置たき事山々あれ共涙に筆も廻り兼りし
 ト讀終り余りの事に興さめ顔千鳥も共にうろくと周章なげき如何いふ譯で浮世なされ
 しにやど怪しめバ監物太郎驚き玉ふの道理ながら先刻殿の禁裏より飯館あされ彼れ
 なる櫻の下にて伊酒宴の折お盃へ花の菝散て入しお無明の悟りを開き玉ひさる心ほそくは

意あされしを拙者打消し置たれは其後伊兩
 女の髪逆立て蛇の如く匝合しを眺覽あつて
 の發心ならん云ふは兩人亂れし髪に心づ
 きつゝ夢の中匝つ匝れつ争ひし覺えの胸に
 あり磯海ふかく隠せし悒氣の焰寝た問も顯
 りれ淺ましき姿をお目に懸たるかト牧の方
 い立つ居つせめて國に残したる石動が人
 ある迄思ひ止つて玉のれと呼止めて呉ぬか
 ど歎くを監物押し止め「今更如何程お止申
 すども最早止まり玉ふまじ先夫よりいお家
 の跡目若君の御身の上殊に隣國なる大内之
 助義弘も密かに反逆のくだてある由聞及



べバ君は通世をされし事を押つゝみ僥倖飯國を赦されし御何日もの如く繁氏卿は飯國と世
 上へ見せかけの邊様よの我君のお装束をゆし一時も早くは出立跡目の願ひのお國から急い
 で御用意をせよと云ふに牧の方置か尤もと歎き止め鳥帽子狩衣髻りさへと持みねて立
 んとする折千鳥の前監物が側にある脇差ひきぬき咽へ馬差と突貫ぬけに殘る兩人や、と斗
 りよ驚きて何故の自害ぞと尋ぬるに千鳥の前涙に聲とくもらせつ「殿様お出家おさせ申
 せしは皆わたしがあせし業若も此身が無つたなら邊様も此様を悲しい思ひのあさるま
 い其申し譯に此通りト心の誠顯ひして謝罪、牧の方哀れを催ふし持し装束身おまどひ「我
 こその假の加藤繁氏千鳥の前の誠を感じ二世も三世も變らぬ女夫と云へ千鳥の手を合せ
 「嬉しき今のお言葉の我君のお詞より忝けあさが千百倍迷ひず成佛いたしますト云ふ首の
 葉が此世の別れ遂に息の絶にけり牧の方いとしさに正体もなく泣沈むと監物太郎お願さ
 れ是非もあくく用意と調へ本國へこそ販りけれ爰に豊前の大領に大内の助義弘と云ふ者
 あり密かに異國を企てうち靡かせん爲近國は事あれかしと窺ひ居しが不斗繁氏の通世せし

と漏聞り此機失ふべからずとて軍勢をかり
 催し筑前へ攻込んと斗るを監物早くも聞つ
 け如何にせんと頻り胸を痛め居たりさて
 牧の方の繁氏お別れしより只管其事のみと
 歎き悲しみ一刻も忘るゝ様のあらざるにぞ
 監物大内の軍勢寄來て若邊様や若君の邊
 身の上に變ある時へ大事の中の大事もゑ僥
 倖我君の紀州ある高野山へ登り玉ひしと傳
 え聞バ邊二方(石動丸)を彼地へ落しまいら
 せ我の此處に止まり敵の軍勢を防んど思案
 定めて此由牧の方へ聞え上れば牧の方の日
 頃殿を尋ねんものと思ひ居たる處ゆゑ兎も



角もよき様にとて今年九才の石動丸と監物の弟女之助を仰ひつゝ忍びやかに館をぬけ出紀州をさして急ぎ行く

○第四回

再説牧の方母子の國に在頃錦の褥に起臥し透もる風さへ厭ひし身も思ひぬ事より仕馴ぬ旅に愛苦勞をバ日と共に重ねて漸く紀州ある高野山の麓かぶろの宿に到りし頃はや日暮しに宿とり損ね詮方なさにある家へ立寄譯と話して宿を頼めバ女房立出夫の代官所へ參つて留守あれせぬ困りあさると無下ぬお断り申すもお氣の毒先免り角も此方へと内へ通して行燈の灯ぐげに互に顔見合せ「貴嬢の繁氏様のは臺所牧の方様でいほ坐りませぬか」左様云其方のお母ぢやないか石「ヤ其方乳母か女」お乳の人かと主従四人是いと斗りに奇過を感じぬさるにても其お姿の何故とお母が問バ牧の方「繁氏道世せしより國の大内に惱され命危ふく逃のびて繁氏高野に在と聞き夫どたづねんど此地迄來りし由涙ながらに物語ればお母の大らに驚き悲しむいとしめやかに喚らふ折から此家の主人玉屋の與次代官の仰をうけ何

やら頻りに考えつ販り來りて牧の方主従を見りより直と馳入り「お尋ね者の落人我目に懸りしころ天命あれいざ尋常お繩よかかれト言バ女之助「無禮をなすと手の見せぬぞト刀をどつて進み出れば與次「妨げなせば不便ながらも首あして代官所へ「差出すあら出して見よト言つゝ刀ぬき拔し切てかかれバ此方も引抜き丁々發失と戦ふに牧の方は先石動丸お母も共にうろくど周章まどふ心をしづめお母一間の障子引外一切ひふ中へ打かぶせ身を捨鏝と乗かかれ互ひに太刀先押へられあがら兩人聲ふり立怪我せぬ中に退たくと云へ



せお婿の頭をふり櫛子聞ねバ愛の放さぬ仔細を話して與次殿と云ふに與次點頭て「さらば
 一通り話して聞さん今日代官所へ行し處此國の領主大内義弘卿より當代官駒形一學殿へ
 此繪姿に合し者其國へ赴きあべから先取て渡せとの仰夫ゆる我々に迄言渡され證據の即ち
 愛あると懐中より出して見すれの紛ひもあらぬ枚の方と石動丸の姿を畫しものなれば一同
 呆れて茫然たりお婿の常から頼もしき夫の心よく知にぞ「サテ其繪のお二人の素生を知て
 か但しの知でか與次「夫りや知ぬ人違ひでも大事な似合し者捕えて來との仰ゆる念
 をもゐさで此場の仕義 お婿「斯あるからい何を隠さう此お二方の以前の主人筑前の大領
 加藤繁氏様の御臺若君其お侍の御家老監物太郎殿の御舎弟女之助殿と聞より與次の飛退て
 左様とい存せず不禮の段眞平御免と平伏すれど心赦さぬ女之助「俄の三拜くはぬ〜我等
 も昔の家來筋杯と古術で油断させ代官所へ注進する下心あらんと云ふと省めつゝ其申し譯
 に見する者ありと箆筒より一刀取出し御臺様への御見しりある刀いざ御覽あれと云ふに故
 の方つくつく見れば實に覺えある我夫の指がへ如何〜其方が所持したる仔細ハト尋るに

與次「元某しの播州瀨入都の方へ奉公のた
 めの折から狐川の渡しにて云々と繁氏に
 刀を恵れし始末を話さて夫より思ひしき
 奉公の口もなけれバ流浪なして此宿へ來り
 し處彼あるお婿の親や夫に死別れ門田と申
 す六才の娘一人を相手にして離く其日の送
 れども左に右に心細しどてさる人の世話に
 より拙者が即ち入夫とあり暮す月日もはや
 四年ト語る折から遙に聞ゆる八馬の聲與次
 聞付てあの物音の正しく追手の來りしあら
 ん咄女之助殿御身と我に此に止り追手の奴
 等を防ぎとめ女房娘の御臺若君の御供をし



で高野へ登れ猶豫する處である早とくと急がしつ各支度を調へて牧の方親子往從四人
の奥よりぬけ出高野をさしてを落延ける與次女之助の阻止り追手の來るを待たけたり

第五回

牧の方の重ねくの辛勞の持病の瘡さし起り進まぬ足をふみすめ漸く高野山の半腹ある
女人堂まで至りけるはや此上の女人禁制にしあれバ女の登る事叶はざるにを石動の母の病
氣心もとあく思へども父に逢たき一念より力なく只一人頂上として辿り行山路に馴ぬ
小兒の足岩に躓る坂に轉び五間行ての立止まり十間歩みて休らひつ頂上ちかくを越さける
爰に加藤繁氏の入道して苳萱遺心と名を改め佛法修行の山坂と辿るも後世の便りのや石動
親子の機縁あるか夫と見るより走り寄「モン御出家様此御山に今道心がましますまは教へ
あされて下されト云へバ苳萱「九百九十の寺々へ毎日入來る初發心左様尋ねての知難し俗
の時の名を言て尋ねられよと身の上の事とは知す説諭せば「されバ尋ねるの我父上二才の
折別れし故お顔の知らねと元の筑紫頼備黨加藤左衛門尉繁氏様と名のれバ諸の我子かと言

んどせしが待暫し佛前にて誓を立し恩愛妹育の愛ぞと思ひよそく敷「年も行ぬに遊々と
慕ひ來る志父が聞バ嘸嬉しく飛立程に思されん然乍ら此山の掟よて假令廻逢とも名乗事
叶のねバ早く國へ飯り母御へ大事に冊くが第一の孝行と言教れと石動丸「我國の大内と言
者お責惱され母様諸共落延て女人堂迄參りしが母様の重なる苦勞に病起り命の内お只一目
殿に逢して吳どのお歎き情と思ふて御有家御存じあらバ教てと涙乍らにかき口説バ苳萱の
堪え兼斷然名乗て聞そのと心乱る折こそあれ後の方の岩かけより師の阿闍梨の聲高く「
ヤア苳萱樂思入無爲の誓と忘れらるゝあト制せられて苳萱心を取直し「繁氏入道の此山
にありせしか共諸國修行に出玉ひ今行滿知れずト言つ懐中より藥取出し「是の師の御
坊一万座の講摩をたら調合ありし妙藥母御に用ひ看病せられよとくと引立られ石動丸
の泣々も實ひし藥を力草弱る心を勵ましつ別れてこそい飯りけれ苳萱の心もどあるに思ひ
す後を慕ひ行牧の方にお埒門田も諸共に石動丸の便與次女之助の安否如何にくと待所へ
與次走來り言葉せししく「不便や女之助殿の追手の爲お打死せられしが某しの御靈若君の

御身の上心にかゝれば惜からぬ命長らへ切脱て参つたりシテ若君にハ早御登山なされしか
 と問問もあらせず追手の者ども與次を追駈來りつゝ夫と見るより追取巻搦め捕んとあしけ
 るにぞ最是迄も覺悟しつ切て出たる與次に續きお尋も夫の脇差引抜共必死と戦ふ太刀に
 確立られて追手の者嘯と乱れて逃出すを夫婦等しく追行けり牧の方ハ是を見やり二人に怪
 我の無様に又石動ハ如何せしやと彼方此方の心配に病ハいとも重り來て最期近き有様に門
 田ハ悲く「コレ御臺様父様や母様の飯迄向卒死すに居て下さいトあたさ娘心も取つ
 捨つ案じつ介抱なせし甲斐もなく終に息ハ絶にけり後へ石動飯り來つあへさ死骸ゆり
 起し「斯なる事と知たなら何しに御側を離れませう情ない御最期やと前後不覺に泣沈む苜
 萱遠目には是を見つ耐り兼てや走來り「是和子よ死したる者ハ嘆くとも詮あし去來愚僧が回
 向して參らせんと口あハ云へと心ハ恩愛の涙堰あへぬ折から與次夫婦立戻りて御臺様の
 御最期かと驚き乍らお尋の苜萱目早く見やり「是ハ御久しや繁氏様と云ふに石動何此御方
 が父上かあまつかしやト取廻る袖を拂つて逃んとする後の方よりヤレ待給へ我君と聲かけ

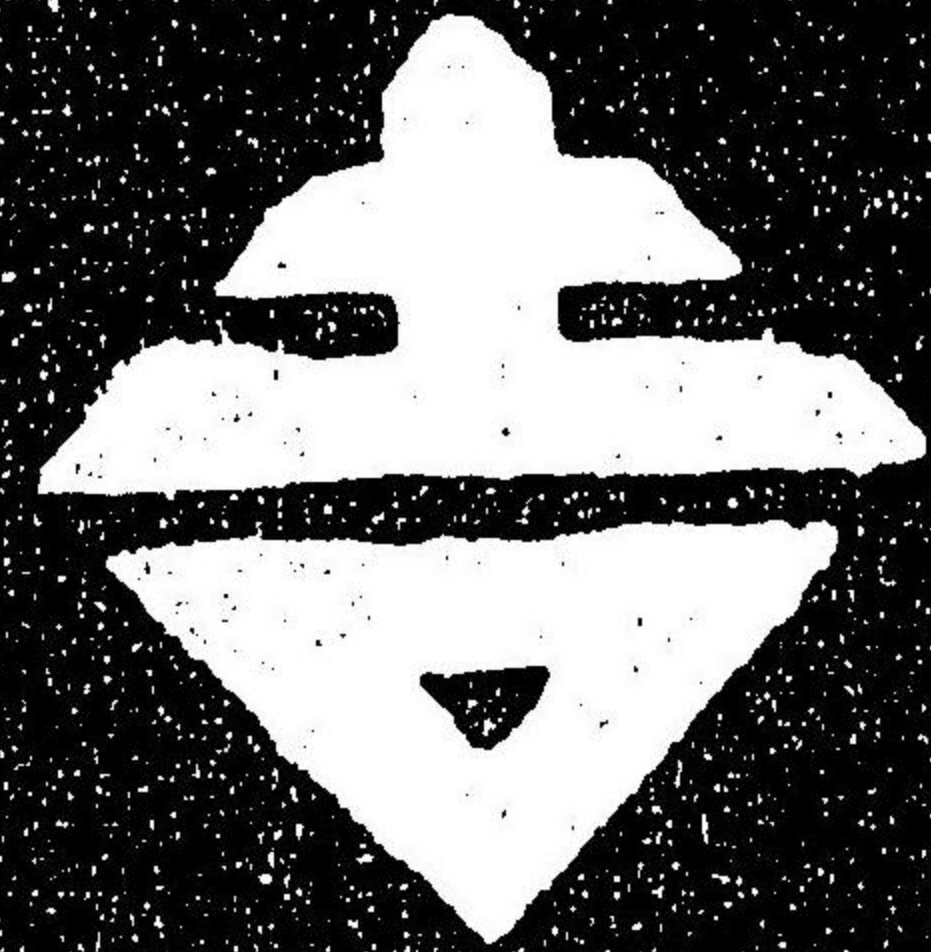
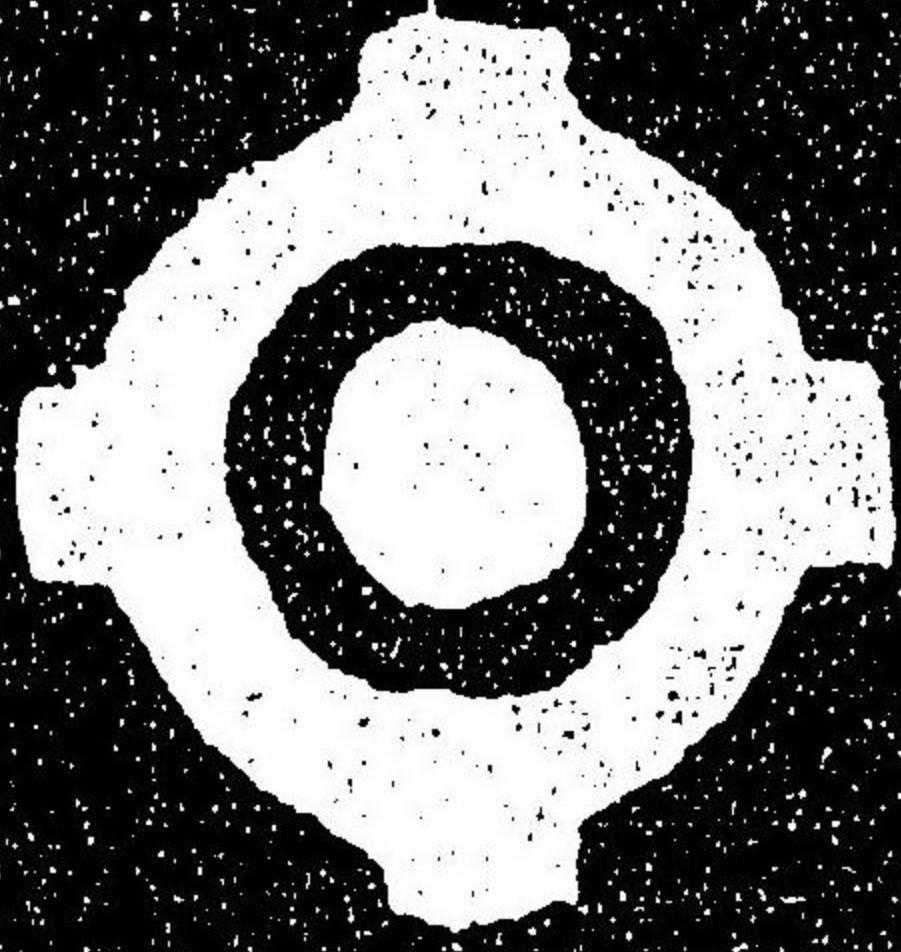
て監物太郎馳來り苜萱の前に叩頭つ「戦ハ我方の勝利にて義弘を生捕此旨朝廷へ聞え上
 し所義弘謀反せしとい言乍ら未だ全く旗上せしに非レバ助命して領地半を削られ其地ハ征
 伐の賞とし加藤の家へ賜り石動丸様は家督相續御免ありたれば若君にハ速々御飯國然るべ
 しとして一同ハ稍愁の眉を開きけりさて是より牧の方の死骸ハ火葬して高野山に埋め千鳥の
 亡靈と共に苜萱厚く吊ひぬ石動丸ハ飯國して父の遺跡に次ぎ監物の故の如く執權として内
 外の百事を司とらせ又與次を揚て家臣となし重く用ひて救難の思を報せしとあん斯りし程
 に家ますく富榮之民も豊に幾久しく無國に目出度事のみ續きけるめでたしくと草双紙
 りかして筆と止む 終

明治廿一年六月十九日印刷
 全年月二十五日出版

編輯兼發行者
 印刷 八

定價金四錢

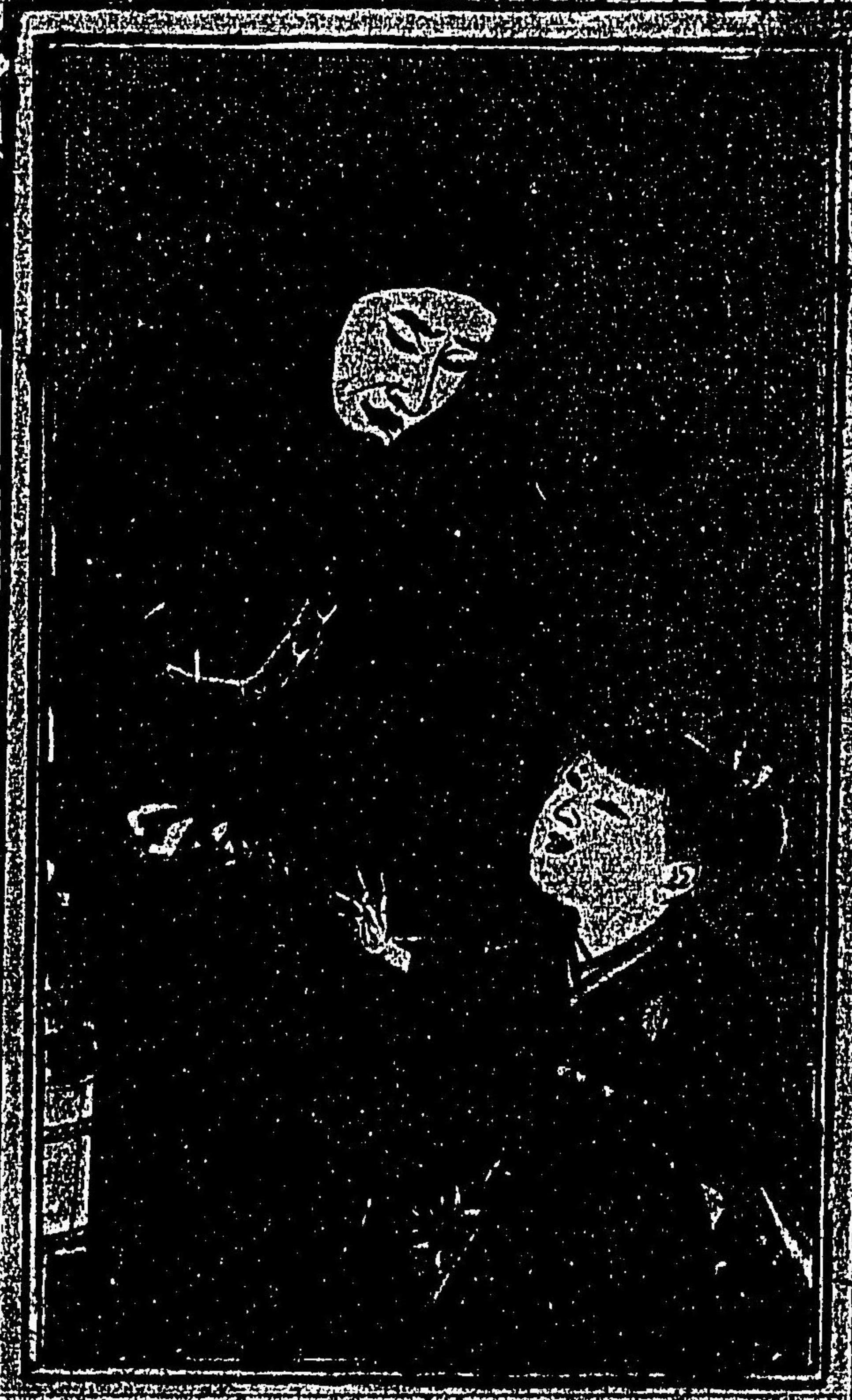
森 仙 吉
 日本橋區橋町四丁目十一番地
 足 立 庚 吉
 本郷區千駄木町五十八番地寄留



精

道

石童丸菫萱實記



特42
849

205021-000-0

特42-849

石童丸菫萱實記

梅亭 金香 / 編

M21

EDV-0013

